

帰国生徒の特性を伸長する教育デザイン

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校

尾崎 誠

1 背景と目的

本校では、昭和55年度より帰国子女受け入れ校として帰国生徒教育に取り組んでいる¹⁾²⁾が、この間、帰国子女を取り巻く状況は大きく変化してきた。外務省の調査では、昭和60年に38,011人だった在留邦人子女の数は年々増え続け、平成21年には61,488人に達している³⁾。さらに、この子どもたちの69.6%が現地校に通っており、現地の言語や習慣の中で生活している(図1⁶⁾)。また、日本を出国後、複数の国や地域に滞在してから帰国するケースや、紛争地域だけを経験するといったケースも増加している。

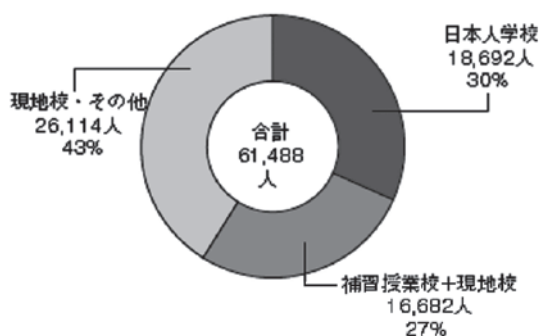


図1 海外の子ども(学齢段階)の就学形態別数⁶⁾

こうした現状において、文部科学省は、国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成する教育(国際教育⁴⁾)を充実させ、帰国生徒に対しては「国内の学校生活への円滑な対応を図るだけでなく、帰国児童生徒の特性の伸長・活用など、海外における学習・生活体験を尊重した教育を推進」⁵⁾している。この背景には、帰国生徒が年間で1万人を超える現代では、従来型の適応教育や国際理解教育では、多様化する帰国生の実態に対応できない上、海外生活の貴重な経験が特性の伸長に十分つながっていないことが問題として挙げられている。

本校においては、学年毎に最大15名の帰国生徒を受け入れている。帰国生徒教育は、帰国生徒を対象にした「適応教育」と、主に一般生徒を対象にした「国際理解教育」の2本柱で展開してきた¹⁾²⁾。しかし、学校評価の結果や、校内における年間反省等において、次の問題が指摘された。

○現在の帰国生徒による活動(以下「帰国生の会」)では、帰国生徒一人ひとりの特性を保持・伸長できていない。

○帰国担当教員は熱心に取り組んでいるが、他の教員の意識が低い。

○帰国生徒を取り巻く状況や、文部科学省の「国際教育」推進施策を十分に踏まえ、帰国生徒教育の全体計画を見直す必要がある。

以上の背景を踏まえ、本稿では、帰国生徒が海外生活で獲得した特性を保持・伸長するための教育デザインについて、本校における実践とその分析・考察に基づいた提案を試みる。そのために、まずはこれまでの「適応教育」を発展させ、帰国生一人ひとりの特性を伸長するための教育デザインを検討したい。さらに、「国際理解教育」の在り方を見直し、帰国生徒の特性を伸長しながら、一般生徒に対する教育効果を高める方策を検討する。加えて、これらの教育活動と様々な学校教育活動を有機的に関連付ける、新しい帰国生徒教育のデザインについても提案する。

尚、本稿においては、帰国生徒の「特性」について、「帰国生徒一人ひとりが、長期的な海外生活を通して獲得した言語運用能力や文化的知識、各種技能、感性、個性といった資質・能力・態度」と定義し、主に長期滞在した国や地域で獲得された能力等を指すことにする。すなわち、海外生活を通して見つけた自分らしさや個性、海外生活を機に結びついた人と人とのネットワークなど、広く包括的にとらえていくことにする。

2 特性の伸長をねらう教育デザイン

2.1 実態把握

最近3カ年の研究から、本校に在籍していた帰国生徒の実態について、次のことが分かっている。

- 学習意欲は総じて高い。
 - 社会科・理科・国語科（漢字）に困難を感じる傾向がある。
 - 日本人学校や補習校を経験した帰国生徒の方が、帰国後の適応がスムーズである。
 - 非英語圏からの帰国生徒は、様々な活動を通して、徐々に在外経験に誇りをもてるようになる。
 - 現地校しか経験していない帰国生は、日本の学校で求められている規範に対する意識が低く、集団行動がうまくとれない傾向がある。
 - 途中編入生は、日本での生活や学校生活に対して大きな不安をもつ傾向がある。その不安を抱えながら、生活に適応しようと努力するが、スムーズに友人関係を築くことができる生徒と、うまく適応できず友人関係を築くことに困難を感じる生徒に二分する傾向がある。後者の原因は様々である。
 - いわゆる「帰国ギャップ」として、周囲の思い込みに対するジレンマ（例えば、日本人学校だったり非英語圏だったりするのに「英語が堪能だろう」と思い込まれてしまうことに対する葛藤）や、文化・価値観の違い（例えば、時間を守る感覚や、謝り方の違い）に対するジレンマを感じる生徒が多い。これが、帰国生徒が抱える最大の悩みであるといえる。
 - 集団生活に慣れない編入生が多い。その原因として、次のものが挙げられる。
 - *現地では少数指導だったため、日本の学級について、人数の多さに驚き、緊張が持続する。
 - *授業の進み方に違和感を感じている。
 - *先生や友人との距離感をつかみ切れない。
 - *孤独感を感じている。
 - 複数の国（地域）での生活経験をもつ生徒は、日本に帰国したというよりは、日本に滞在しているととらえる傾向がある。
- さらに、帰国生徒の保護者からのインタビューや協議から、帰国生徒やその家族の状況について、次の実態が明らかになった。
- 海外生活を体験した帰国生徒は、家族との密度が濃い。例えば、SARS対応で家族全員の外出が禁じられた国（地域）で生活したとき、家族で過ごす時間が非常に多かったことに起因する。

- 親は、海外生活によって、自立するチャンスを逃したと考え、自立をうながす教育を望むことが多い。例えば、治安の悪い地域で生活した場合、子ども一人で外出させられないため、家族が必ず付き添うという習慣が親子ともに身に付いたことに起因する。
- 電車やバスへの戸惑いが非常に大きい。特に、路線の複雑さ（乗り換えの難しさ等）や、列車種別の複雑さ（各駅停車と急行の区別等）、運行時刻の正確さに戸惑いを感じる人が多い。
- 授業形態の違い（40人学級で、一斉授業を主体とする学習形態等）や、授業が進む速さ、学習量の違いに驚いて、塾に通わないと学習適応が難しいととらえている。
- 帰国生徒が滞在国内（地域）のことが大好きである場合、その国のことを正直に友人に話してしまうことで、かえってその国（地域）のイメージが悪くなるのではないかと心配していることが多い。

以上の実態から、帰国生徒教育デザインを考える上で考慮すべき点は次の4点に集約される。

- ①生活面の適応については、友人関係を上手に築く力を身に付けるための支援や、自立をうながす支援が必要である。
- ②学習面の適応については、学習形態の違いに慣れさせる支援と、補習支援が必要である。これは帰国生徒一人ひとりに対して個別に対応する必要がある。
- ③一般生徒とのかかわりについては、帰国生徒一人ひとりのことを理解し合えるような機会を設け、「帰国ギャップ」を縮小するような支援が必要である。
- ④保護者との連携を密にしながら、帰国生徒一人ひとりが、目の前の困難を乗り越えることばかりにならないよう、将来を見つめ自己実現を目指すような支援が必要である。

この①から④の考慮点を踏まえ、3年間を見通した帰国生徒教育をデザインすることにした。

2.2 全体構想

帰国生徒教育の機能は、帰国生徒を対象としたもの、帰国生徒の家族を対象としたもの、一般生徒を対象としたものに大別できる。このとき、帰国生徒が成長していくステージを3つに設定し、関連する教育活動（特に帰国生徒を対象としたもの）を整理することで、帰国生徒教育の全体構想をまとめた（図2）。それぞれのステージは、次のように位置づけた。

(1) ステージ1：適応教育

適応教育は、帰国生徒教育における第一義のステージとして、帰国生徒が日本での生活に適応するための支援教育と位置づける。生活面の適応、学習面の適応を中心に、帰国生徒一人ひとりの自立を支援していく。

生活面の適応では、日本の生活習慣に慣れることだけでなく、礼儀作法の指導、電車やバスの乗り方の指導など、生活上の不安を軽減させる支援も行う。学習面の適応では、現地校経験者が増加した現状を踏まえ、日本と現地との教育課程(カリキュラム)のずれを埋める支援を行う。未履修領域の学習内容を補充したり、分かりにくい用語(例えば理科で用いる実験器具の名称)を解説したりする。適応教育では、日本語運用能力の向上や、帰国生同士の交流に重点を置くため、補習学習や、学級担任との交換日誌(帰国生日誌)といった活動に取り組む。

この「適応教育」は、日本の生活へ適応させるだけでなく、今後の海外生活において、どの国・地域にも早く

適応するための資質・能力を養うこともねらい、この先のステージや進路選択の基盤を築いていく。

(2) ステージ2：国際理解教育

国際理解教育は、帰国生徒教育における第2ステージとして、帰国生徒が自身の海外生活をじっくりふり返りながら、海外生活で獲得した特性を保持するための教育と位置づける。一般生徒に対する情報発信や、一般生徒との相互啓発を中心に、帰国生徒一人ひとりの「帰国ギャップ」の縮小(ジレンマの解消)を目指す。同時に、相互啓発を通して、一般生徒の国際性向上を目指す。

具体的には、海外生活の体験発表会を開催したり、帰国生新聞(図3)や文集「遙」を発行したりすることで、一般生徒一人ひとりに、帰国生徒の体験や経験が直接伝達されるような活動を展開する。

(3) ステージ3：特性伸長教育

特性伸長教育は、帰国生徒教育における最終ステージとして、帰国生徒が抱える様々なコンプレックスを克服し、アイデンティティを確立していくための教育と

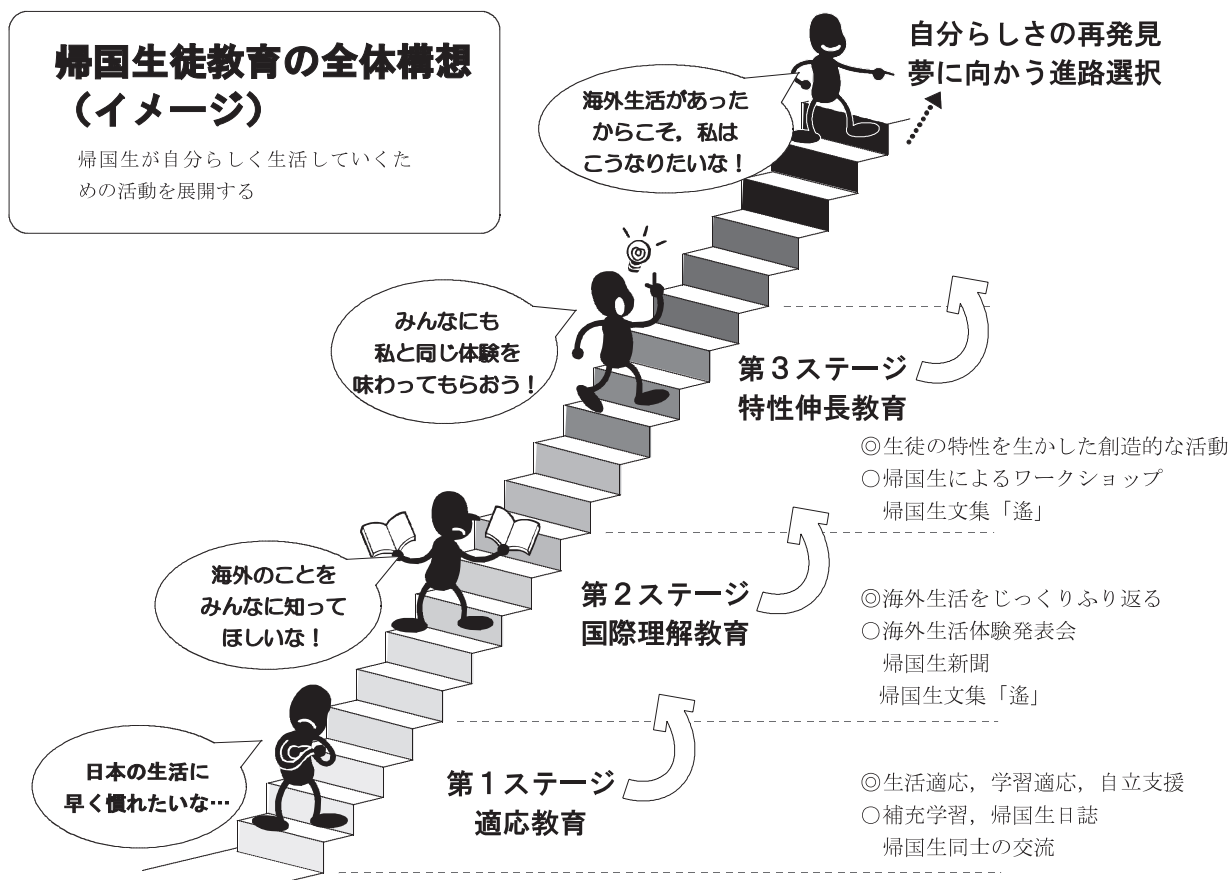


図2 帰国生徒教育の全体構想

位置づける。帰国生徒の特性を生かした創造的な活動を通して、自分らしさの再発見をうながしたり、海外生活経験を生かす自己の生き方・在り方を考えさせたりする。そのために、「適応教育」と「国際理解教育」での成果を基盤に、一般生徒に海外生活を疑似体験させるような活動(帰国生ワークショップ)を企画・運営させることで、特性の保持・伸長を目指す。

今年度の実践では、帰国生ワークショップは「発信と体験」をコンセプトに、国(地域)単位の発表グループとパビリオンを設定することにした(図4,表1)。「発信」は、第2ステージ(国際理解教育)を発展させたものととらえ、過去の海外生活体験の紹介だけでなく、現在の海外とのつながりを生かしたり、今だからできることをプロジェクトとして取り組ませたりすることにした。「体験」は、参加型ワークショップ形式による体験活動を企画し、帰国生徒が特性を発揮しやすく、一般生徒が海外生活を疑似体験しやすい内容を考えさせることにした。このような形式にできたのは、教育デザインによって第3ステージの位置づけを明確にしたことで、帰国生徒が第1・第2ステージとの違いを理解しやすくなったことが挙げられる。

2.3 他の教育活動との有機的な関連付け

教育デザインの構築にあたり、前項で設定した全体構想に基づき、帰国生徒教育と、他の教育活動との関連を表2のように整理した。

(1)「帰国生の会」の意義

帰国生徒が定期的集まって展開する教育活動を「帰国生の会」と呼び、毎週1回、放課後に1時間程度で開催している。従来、適応教育の色合いが強かったが、全体構想の見直しに伴い「帰国生が自分らしく生活していくための活動を展開する」ものとして位置づけることにした。これにより、「帰国生の会」は、帰国生徒教育のデザインにおける中心的な役割を果たすことになった。

(2) 適応教育との関連

「帰国生の会」における補習学習や、学級担任との交換日誌(帰国生日誌)だけでなく、日常の帰国生徒の様子を丁寧に観察することで、帰国生徒のつまずきに気付き、自分の力でそれを乗り越えさせるような個別支援を行うことができる。具体的には、学校生活への適応を支援したり、学習への適応を支援したりしながら、帰国生徒一人ひとりについて、生活での自立を支援していくことができる。



図3 帰国生新聞の例

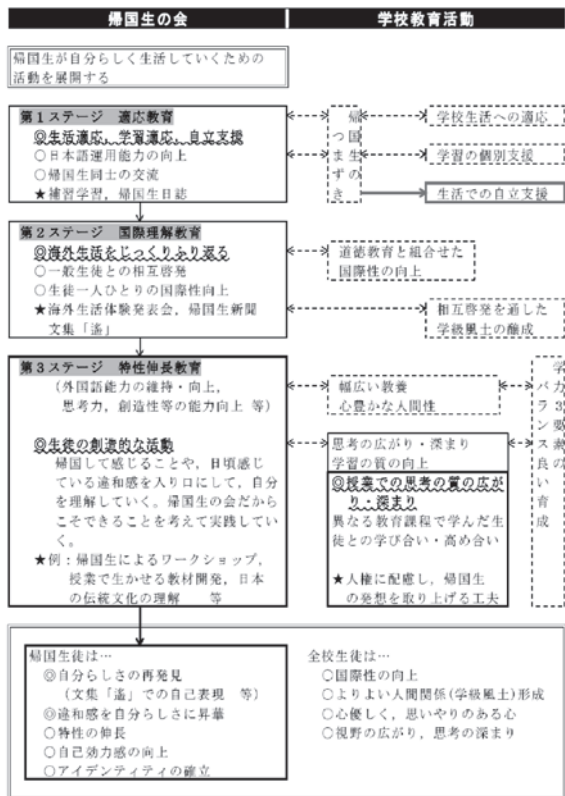


図4 帰国生ワークショップの様子

表1 帰国生ワークショップの内容(平成22年度)

| | パビリオン名 | プログラム内容 |
|--------|--|---------------------------------|
| 発表 | POLIZEI (ドイツ) | ドイツ各地のルールやマナーを劇形式で紹介。 |
| | EUトモダチ | 海外にいる友人に日本の印象をインタビューし、現地の言語で紹介。 |
| 体験 | 赤道直下館 | シンガポールの世界一を紹介。 |
| | 南米館 | 南米と日本のカルチャーの違いを、クイズ形式で紹介。 |
| | イギリス館 | 英語と米語の違いを映像で紹介。現地の遊びも体験。 |
| | アジア館1 | 中国の遊び(中国ゴマ、セバタクロ)の体験。 |
| | アジア館2 | 中国、香港、タイ、スリランカの料理(調理したもの)を紹介。 |
| | アメリカ館1 | Easter Egg Huntingの体験。 |
| アメリカ館2 | アメリカの体育の授業で遊ぶゲーム(Sharks and Minnows)を体験。 | |

表2 学校教育活動との相互関連



(3) 国際理解教育との関連

「帰国生の会」を中心に取り組む海外生活体験発表会や帰国生新聞の発行といった活動をふり返り、道徳教育と組み合わせることで、国際性の向上をうながすことができる。年間2回、道徳の時間の読み物資料として、帰国生文集「遙」を活用し、道徳教育で扱う価値項目「4- (10) 国際理解」に関連する主題を設定することで、道徳性の発達をうながしながら、国際性の向上につなげていくことを重視している。

さらに、帰国生徒と一般生徒の相互啓発(温かい雰囲気づくりや、感想交流等)を通して、よりよい学級風土を醸成していくことができる。これは、帰国生徒にとって、友人関係を構築しやすくすると共に、集団の質の向上を期待できる。

(4) 特性伸長教育との関連

「帰国生の会」ならではの活動を展開し、特性を生かす場面を設けることで、帰国生徒一人ひとりの幅広い教養や心豊かな人間性を育むことができる。そのためには、帰国生徒による創造的な活動や、帰国生徒同士または一般生徒との協同的な学びの場を保障することが必要である。

授業においては、帰国生徒が滞在国(地域)で学んだ概念を生かして思考・判断し、その結果を表現することで、授業で扱う思考・判断・表現の質的な広がりや深まりを生み出すことができる。このように、異なる教育課程で学んだ生徒との学び合いや高め合いによって、教育の質的な向上を期待できる。その際、人権に配慮し、帰国生の発想を取り上げる工夫が必要である。

2.4 ねらう教育効果

2.3で述べたように、3つのステージを核にした教育デザインによって、帰国生徒教育に限らず、学校教育全体の教育の質的な向上を生み出すことが期待できる。そして、次のような教育効果を期待できる。

(1) 帰国生徒に対する教育効果

自分らしさの再発見、違和感を自分らしさに昇華する、特性の保持・伸長、自己効力感の向上、アイデンティティの確立、等。

(2) 全校生徒に対する教育効果

国際性の向上、よりよい人間関係(学級風土)の形成、心優しく思いやりのある心の醸成、視野の広がりや思考の深まり、等。

3 教育活動の実践と教育効果の検証

今回の教育デザインによる教育効果について、デザインの中核になる「帰国生ワークショップ」の事例について取り上げ、特性の保持・伸長や、他の教育活動への波及効果について検証した。

3.1 帰国生徒が特性の伸長を実感する要因

「特性」については幅広いものとして定義しているため、資質・能力・態度の詳細な分析ではなく、「帰国生ワークショップ」の事後調査(ふり返り)への記述内容から、特性の伸長に有効なキーワードの抽出を試みた。事後調査では、帰国生徒に対して「今回の取り組みで、海外生活で身に付けたこと(語学力、感性、価値観、文化的知識、コミュニケーション力など)を、維持したり伸ばしたりできたと思いますか」と質問し、「思う」「どちらともいえない」「思わない」の3件法による回答と、その理由の回答を求めた。調査対象は、在籍する帰国生徒41名で、回答率は100%であった。記述内容は、Kh Corderを用いた計量テキスト分析⁷⁾によって、用語の出現頻度や関係性について検討した。

帰国生徒の実感として、「思う」と回答した(特性を保持・

伸長できたと感じている) 生徒は 29 名 (70.7%), 「どちらともいえない」と回答している生徒は 10 名 (24.4%), 「思わない」と回答した生徒は 2 名 (4.9%) であった。「思う」と回答した理由を分析し, 出現頻度の高い抽出語を表 3 に, その関連性をクラスター分析した結果を図 5 に示す。クラスター分析においては, Jaccard 法によって距離を算出している。

クラスター分析から, 帰国生徒が特性の伸長を実感した因子を 3 群 (図 5 中 I, II, III) に分けることができた。そこで, これらの用語と, 出現数の多かった「できる」を組み合わせた表現を生徒記述から抽出し, KJ 法によって分類した結果, 帰国生徒自身が特性を保持・伸長できたと実感した要因として, 「要因 1: 知識の思い出しや, 新たな知識の獲得」「要因 2: 特性を生かした表現活動やコミュニケーション活動」「要因 3: 特性の保持・伸長に対する直接的実感」の 3 つを抽出することができた (表 4)。

要因 1 と 3 は, それぞれ図 5 の I と III に対応しており, 帰国生徒が直接的に特性の伸長を実感できる要因になる。一方, 要因 2 は, 図 5 の II に対応しており, 帰国生徒と一般生徒が海外生活について会話したり議論したりする場面を通して, 間接的に特性の伸長を実感できる要因であるといえる。帰国生徒が, 生徒集団の中で海外生活体験を気軽に話せたり, 特性を自然に発揮できたりする風土を培うことは, 特性を伸長させる重要な要因になると考えられる。

今回の実践では, ワークショップ形式によってこれらの 3 要因が全て含まれたため, 帰国生徒が特性の保持・伸長を実感しやすかったと考えられる。さらに, 他の活動においても, 教育デザインの変更に伴ってこの 3 要因が含まれ好影響を与えたと考えられる。

3.2 特性の伸長に必要な要因

帰国生ワークショップの事後調査において, 教師に対して「今回の一連の取り組みは, 帰国生の特性の維持・伸長に寄与していると思うか」と質問し, 「思う」「どちらともいえない」「思わない」の 3 件法による回答と, その理由の回答を求めた。調査対象は, 本校教員 27 名で, 回答率は 59.3% であった。回答した教員は全員「思う(特性を保持・伸長できた)」と回答していた。理由の記述について, 出現頻度の高い抽出語として「自分」「帰国」「体験」などが抽出された。また, 抽出語間の関連性をクラスター分析し, 特性を保持・伸長する上でワークショッ

表 3 「思う」と回答した生徒の記述における頻出語

| 抽出語 | 出現数 | 抽出語 | 出現数 |
|-----|-----|-----|-----|
| できる | 21 | 自分 | 8 |
| する | 14 | 日本 | 8 |
| 思う | 13 | 知る | 7 |
| 発表 | 9 | 文化 | 7 |

(n=799)

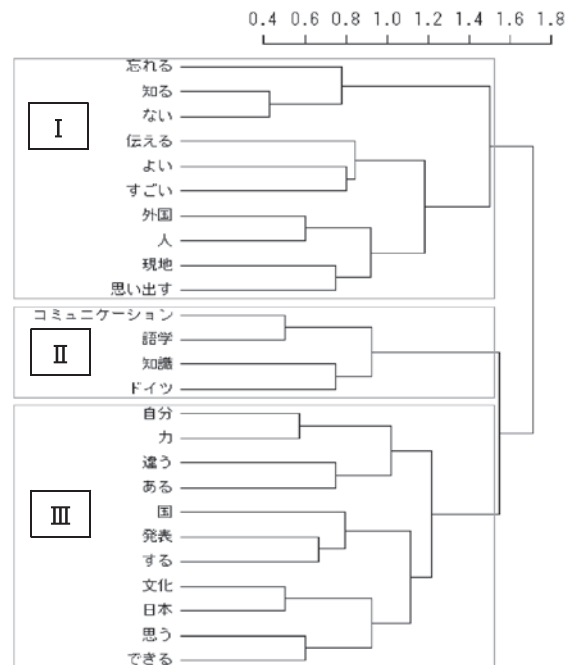


図 5 特性を伸長できたと実感した理由のクラスター分析 (Jaccard 距離による)

表 4 特性を保持・伸長できたと実感した要因

| |
|--|
| <p>要因 1: 知識の思い出しや, 新たな知識の獲得</p> <p>典型例</p> <p>「アメリカの文化を忘れないで詳しく<u>知ることができました。</u>」</p> <p>「私はすごく現地の食などが好きだったので, それをもう一度つくったり, みんなに伝えられて, もっとよく<u>知ることができた</u>と思うからです。」</p> <p>「現地の人の生の言語に徐々に触れて, 現地の人々の感性等を<u>思い出す</u>ことができた。また, 外国の人の日本に対するイメージを聞いてみて, 自分自身も日本や文化に対する価値観を伸ばせたと思う。」</p> |
| <p>要因 2: 特性を生かした表現活動やコミュニケーション活動</p> <p>典型例</p> <p>「自分たちが住んでいた国について考えてみたら, 日本と全然違うことがたくさんあり, そのことをまとめ, <u>発表</u>できたことに, 自分の成長に気付くことができた。」</p> |
| <p>要因 3: 特性の保持・伸長に対する直接的実感</p> <p>典型例</p> <p>「シンガポールには, 世界一のものが多いから, 名前とかを覚えることができたから。あと, 身に付けたことは, <u>語学力を伸ばしたり</u>できたと思う。」</p> <p>「中国ゴマは (一般生徒にとって) 思ったよりも難しかったらしく, いつのまにか自分が身に付けていた力を<u>改めて実感</u>できた。」</p> |

プが有効だった点として、「自分の体験や特性をふり返る機会」になったこと(図6Ⅳ)と、「(発表などを通して)経験がもつ価値を再確認する機会」になったこと(図6Ⅴ)の2因子を抽出した。この2因子から、一般生徒に海外生活を疑似体験させるというワークショップのコンセプトが、第2ステージ(国際理解教育)との違いを明確にしていたといえる。

3.3 一般生徒の国際性伸長

(1) 体験や経験を通じた、興味・関心の喚起

一般生徒の国際性伸長については、帰国生ワークショップの事後調査における自己評価を集計・分析し、興味・関心の向上について検討した。ワークショップ終了後、全校生徒に対して「海外の生活や文化に興味をもちましたか?」と質問し、その評価を4件法による自己評価とその理由の併記によって記述してもらった(表5)。

その結果、全校生徒の89.4%が「とても興味をもった」「興味をもった」と答えており、その記述には、「外国の文化に触れることができた」「様々なことを感じる事ができた」といった、五感で感じ取ったという表現が多く見られた。従って、3.1や3.2での考察も踏まえれば、一般生徒が体験や経験を通して興味・関心を喚起させるよう働きかけることが、一般生徒の国際性向上に有効だといえる。

(2) 第3ステージ(特性伸長教育)の波及効果

さらに、このような帰国生の会の活動が、一般生徒の進路選択に影響を与えている例も見られた(図7)。この例は、3年生が面接試験に向けて作成した自己PR用紙に書いたもので、帰国生徒との協同的な学びを継続したことが、進路決定に強く影響を及ぼしたことが分かる。このように、自分の身近にいる仲間が、自分にはない体験・経験をしていることを認識したことで、自身が国際社会で活躍することを明確に意識するようになったことは、教育デザインにおける第3ステージ(特性伸長教育)が、間接的に一般生徒の国際性伸長に寄与していることを示唆している。

(3) 協同的な学びを通じた、教育の質の向上

各教科では、一般生徒と帰国生徒が同じ内容の授業を受けている。実践では、授業場面において、一般生徒とは異なる、帰国生徒ならではの感性や思考を取り上げることで、教育の質が向上した事例があった。

3年生英語科の学習において、生徒A(3年女子、スペインに滞在)は、教科書の本文を音読する場面で、

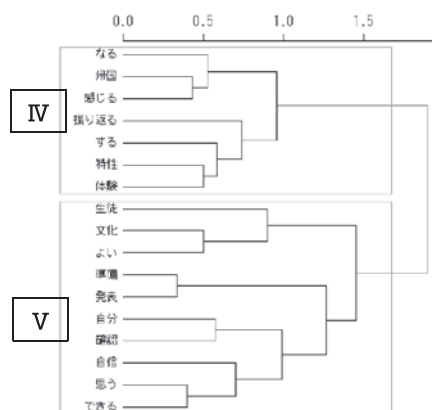


図6 教師が「特性を伸長できた」と判断した理由のクラスター分析(Jaccard距離による)

表5 帰国生ワークショップ事後調査に於ける一般生徒の興味・関心

| | ◎ | ○ | △ | × | 無回答 |
|----|-------|-------|------|------|------|
| 1年 | 70.4% | 25.8% | 0.0% | 0.0% | 3.8% |
| 2年 | 60.6% | 29.4% | 1.3% | 0.0% | 8.8% |
| 3年 | 69.8% | 21.4% | 0.0% | 0.0% | 8.8% |
| 全体 | 66.9% | 25.5% | 0.4% | 0.0% | 7.1% |

凡例：◎とても興味をもった ○興味をもった
△あまりもてなかった ×もてなかった

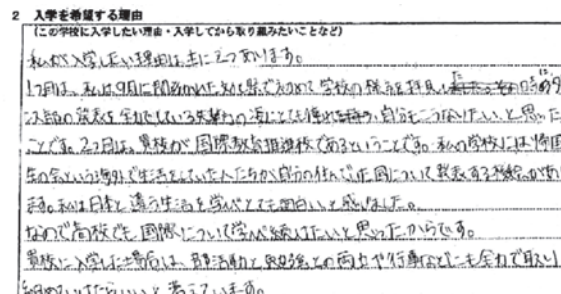


図7 3年生の進路選択に影響を及ぼした例

登場人物の心情を表そうと、声のトーンや強弱等を一般生徒に比べて大きさに表現し発表していた。授業末の感想記述(図8・左)では、スペインに住んでいた頃の経験を思い出し、スペインで大きさと思われる程度が、英語圏では普通に受け取られるのだということに気付いている。また生徒B(3年女子、上海・香港に滞在)は、教科書中に"famous places in China"という表現が表れた際に、学級で上海万博のことや、そのテーマソングが日本の曲に酷似していたことが話題になった場面をふり返り、日本人の感覚と中国の人の感覚の違いに驚いた様子を記述している(図8・右)。こうした感想(感覚)は、帰国生徒ならではのものであり、これを教師が取り上げ

たことで、授業に参加していた生徒一人ひとりが、英語圏だけにとらわれない国際的な視野を広げることができた。

このように、帰国生徒と一般生徒が協同的に学ぶ場面において、帰国生徒が感じたことを、機会を逃さずに取り上げることが、教育の質の向上に大きく寄与するものであることが分かった。

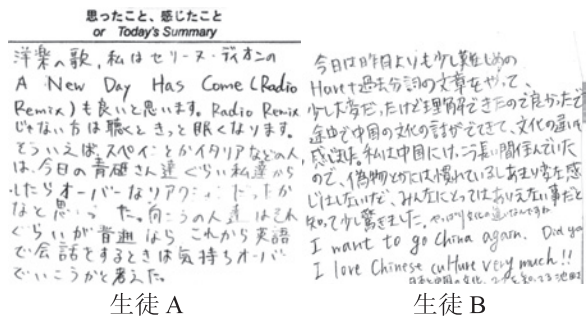


図8 帰国生徒の特性が発揮された様子を
読み取れる感想記述例

5 成果と課題

帰国生徒の特性を伸長する教育デザインについて、次の知見を得ることができた。

- ①帰国生徒一人ひとりの特性を維持・伸長するためには、一般生徒と協同的に学ぶ教育活動（ワークショップ等）を設定することが有効である。
- ②帰国生徒の自立が遅れる傾向が見られる場合、保護者に頼らず生徒自身が海外生活体験を伝達・表現するような教育活動を展開することで、帰国生徒一人ひとりの特性の保持・伸長を図りながら、自立をうながすことができる。
- ③帰国生徒は、海外生活体験の発表といった、一方的な「発信」よりも、一般生徒との交流を伴う「受信・発信」があった方が、自身の特性を保持・伸長できたと実感する傾向がある。

3年生の帰国生徒は、「帰国生の会」の活動を通して、帰国生仲間が増えた、滞在国の良さを改めて実感できた、自身の特性を保持・伸長できたといった感想を述べている。また、自身の将来について、「帰国生の会」

での経験がきっかけになり、多くの人に外国のことを発信したい、人に何かを伝えるような仕事をしたい、もう一度その国に行ってみたい、世界の子どものために何かをする仕事に就きたい、海外で暮らしたい、色々な国の人とかかわりたいといった考えを表明している。中には、今回の教育デザインによって、「やってる方も今回の方が楽しくて、すごくおもしろかった」「帰国生を大切にしてもらってと思った」という感想も見られた。

帰国生徒教育の特性を伸長する教育デザインは、帰国生徒一人ひとりを見つめ、海外生活経験を正面から受け止め、自己のもつ特性に自信をもたせ、自己の将来の在り方・生き方を考えさせることが大切である。

6 引用文献・参考文献

- 1) 附属鎌倉中学校：帰国生の個性を生かした国際理解教育の実践―「個性を伸ばす学習指導」を活用して―、本校研究紀要第21集、1996、p.1
- 2) 附属鎌倉中学校：帰国生の特性が生きる国際理解教育、明治図書、1991、p.11
- 3) 文部科学省：平成21年度文部科学白書、2010、第8章第1節の2、図表2-8-2
- 4) 文部科学省：初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～、2005、p.3
- 5) 文部科学省：平成21年度文部科学白書、2010、第8章第1節の3
- 6) 同 第8章第1節2 図表2-8-1
- 7) 樋口耕一、「テキスト型データの計量的分析―2つのアプローチの峻別と統合―」、理論と方法、Vol.19 No.1、2004、pp.101-115

謝辞

本研究の遂行にあたり、本校教諭 郷志帆先生、對馬公絵先生、松居佐弥先生には、共同研究者として教育デザインの構築から教育活動の実践まで一貫してご尽力戴きました。記して感謝申し上げます。